

高砂神社の玉垣について

高砂神社におまいりすると、周囲を取り囲む玉垣の石柱のなかに、江戸時代の人々の名前が刻まれているのを見ることができません。

この玉垣の石柱は、もともとは三代目の相生の松を囲んでいたものでした。相生の松は雄松と雌松が幹下部であわさった珍しいもので、二木が「相生」うとのことで夫婦が共に年を取るめでたいたとえともなった神木でした。昭和三年（一九二八）に枯れましたが、その時の樹齢は約四百年、江戸時代の人々にも信仰された松だったのです。

こうした御神木を囲む玉垣がいつ頃どうやって作られたかは記録を調べてみなくてはなりません。石柱に刻まれた文字も参考になります。これは玉垣を寄付した人々の名前や住所だからです。先日市史編さん室で実施した玉垣の調査の成果を紹介しましょう。

石柱の数は計二二九本。奉

納者としては干鯛仲間・高砂の宿屋中・摂津灘の油絞屋仲間などの団体や、個別の商人があり、複数の石柱を奉納している例もあります。奉納者が一番多いのは大坂で、琴平参りの船宿や砂糖問屋や北国問屋、船乗りなど様々な職種の者がいました。北は北海道の松前・箱館、西は九州の平戸や伊万里まで、日本海・九州・瀬戸内の港町や城下町の商人が石柱に名を残し、中には新潟の当銀屋などの豪商も含まれます。相生の松の名高さとともに、高砂と地方とのつながりの深さがわかります。

（高砂市史編さん専門委員

中川 すがね）

